

「まちづくり」をしませんか

北海道建設部まちづくり推進課
木 本 晃

交通問題の専門家であるみなさんは、いわば「まちづくり」のプロとして、それぞれの知識と経験、考え方をこれまで活かしてこられたことと思います。

私もまた、建築、都市計画行政の経験を踏まえ、現在、「まちづくり」行政に関わっている者です。責任と自覚を持って「まちづくり」に臨んでいます。

しかしながら、住んだことのない「まち」や、行ったこともない「まち」の課題、悩みを聞きながら、一般論とにわか仕込みの知識で市町村職員と一緒に解決の方法を探る、そういう日々の自分の仕事のあり方に、いささかの疑問と傲慢さを感じているところでもあります。それが正直な気持ちです。

みなさんに向かって、「まちづくり」の知識や技術を披露する勇氣はありませんが、時にはひとりの市民として「まちづくり」を考えてみることも大切ではないかと考えました。今回は、市民のひとりとしての「まちづくり」への参加のお誘いです。どうかよろしくご一読ください。

「まちづくり」とは「結果づくり」に終わらない「人づくり」「仕組みづくり」だと言われています。そして、最近では、「まちづくり」には経済的にも「地域を元気にする取り組み」であることが求められています。

「まちづくり」のことに少しでも関わっている人は「中心市街地の活性化」が今日の課題なのだと考えていることと思います。「まちづくり」のことを特別に考えることのない人でも「景観のまちづくり」「福祉のまちづくり」「安心・安全のまちづくり」「環境のまちづくり」という言葉を聞いた

ことはあるはずですが。

「まちづくり」の定義はいろいろでかつ曖昧です。それゆえ便利に使われますが、都市計画とどう違うのか、市民活動のことなのか、都市全体をつくることなのか、身近な地域をどうにかすることなのか、きちんと区別して使われていません。ましてやそれが行政の仕事なのか、一部の熱狂的な「まちづくり好き」に任せておけばいいことなのか、商店主が取り組むべきことなのか。誰だって、まさか自分も「まちづくり」のために何かをしなければならないなどとは思っていません。そもそも、今のままで困っていないし、自分は多くを望んでいないと思っています。「まちづくり」はやりたい人がやればいい。そう思っていますか。

そもそも「まちづくり」という言葉がどういう意味で使われているのかは大きな問題ではないのです。それよりも、「まちづくり」が子どもたちの不良化を防ぎ、生活に安心と潤いを与え、地域の経済を活性化させ、文化を育て、観光客など外から人を呼び込み、「自分の価値」を気づかせる。そういうことに気づいてください。むしろ、そういうものを私は「まちづくり」と呼んでいる。「まちづくり」とは決められた手段や手法ではなく、また、目的が達成されれば終わるというものでもないからです。

「まち」はひとりのものではありませんから、全員の欲望や要求を満たすことは所詮無理です。少しでも自分の思い通りにするためには、理解と納得、時には説得と諦めが必要です。誰もが「好きなまち」を選んで暮らせるならば話は別ですが、多くの場合は「暮らしているまち」を好きになるしかありません。

「まちづくり」とは「どんな暮らしをしたいの

かを考える」ということから始まる、「集まって住むことの仕組みづくり」だと考えています。「身近な地域づくり」が最初にあって、そうやってつくられた幾つもの地域が重なり、つながって「まち」をつくります。人が集まれば「まち」らしいものはできますが、気持よく住み続けるには知恵がいられます。その知恵のことを「まちづくり」と呼んでいいでしょう。

集まって住むことの仕組みづくりは都市計画というルールだけではうまくいかないことがわかってきました。道路や公園、下水道、住むところ、働くところ、買物をするところ。多くの人が集まって暮らす準備はほとんど整いました。好きな場所を選ぶ自由も手段もあります。ただ、そこから先が問題なのです。みなさんの要望、要求が様々で、行政だけではその多様な要求に応えることはできません。行政は公平であることを必要とするからです。さらに、行政は何かを始める前にルールをつくらなければならない仕組みになっています。それゆえ時間がかかります。だからこそ、私たちもみなさんも、身近な地域のために自分にもやるべきことがあることに気づくべきだと思うわけです。自分にできることを探すべきだと考えるのです。「今のまま」でいいと思っても、「今のまま」を維持すること自体が難しいということ、認識することが大切です。自分ではよくても、自分のことはどうにかできても、自分ではどうしようもない人が大勢いることに気づくことが大切です。自分のためだけにではなく、困っている誰かのために、無理をしない範囲で自分にできることをする。「まちづくり」とはそういうものだと考えています。それは行政だとか民間だとか言う前に、私たち市民、大人の役割だと思のです。

機能性、合理性、経済性だけでつくられた「まち」は「お金があれば要求を充たすことができる社会」をつくりました。しかし、それは「お金で買えないものは仕方ないという社会」でもありません。手に入れられるからといって欲しがらなく、欲しいものが何なのかを考えていきたいと思います。

まちづくりとは何か

住んでいる、働いている「まち」に何を望むのか。私は自分の関わっている「まち」、時々出かけるところや身近な地域に「安心」「暮らしやすさ」「楽しさ」「誇らしさ」を期待しています。

例えて言えば、犯罪が抑止されていることです。見知らぬ、何をするかわからないような不気味な者がうろろしていないこと。目をあわせられないような子どもたちが徘徊していないこと。働きがいのある職場があること。満足できる住まいがあること。適正な価格で買物ができること。娯楽、出会い、感動が期待できること。友人に自分のまちを語って聞かされること。努力すればどうにか満たされる未来が用意されていることです。

言いかえれば、「安心」とは心配してくれたり心配してあげる親戚や友人、知人がいること。見知った者同士としての会釈があり、よそ者と見なれた者を区別する地域のコミュニティがあること。地域への気配り、相互扶助が残されていること。あるいは緊急時の社会的なサポートが用意されていることです。「暮らしやすさ」とは多様な職場、任せられる労働力、手ごろな商店街、居住に関するいくつもの選択肢が用意されていることです。「楽しさ」とは選べる都市的サービス、人間や自然との触れあいの場、出かける場があり、自分を確認する機会があるということです。「誇りに思う」とは、文化、歴史、個性、らしさ。「まち」に「物語」があることです。

道庁や市町村、要するに私たち行政機関にとって「まちづくり」とは、ひとつひとつの行政課題に優先順位をつけて、それを効率的に解決していくことではなくなりました。むしろ、総合的な目標をかけた、それぞれの行政施策が何のためにあるのかを明確に示すことが大切になってきています。多様な価値を受け入れるということは、大勢の人が賛成するものが必ずしも最も大切だということではない、という考え方を受け入れるということです。人びとの思いに優先順位はつけられません。また、効率的に解決することがいいとばかりは限りません。語らいながら、理解しながら、時間をかけて解決していくことの価値に気づいたからです。身近な空間も建物も、愛され、誇りに

思われるためには、実際に使うみなさんがつくる時から「関わること」が必要です。

一方、住んでいるみなさんにとって、「まちづくり」とは自分の関わっている場所を少しでも良くしようということなのだろうと考えています。これまで、地域の不満は行政に要求することが解決の道でした。個人の要求が通らない時には団体で、正面からぶつかって動じない時には議員を使って要求しました。しかしながら、今日、行政の側には厳しい財政事情があり、みなさんの側には多様なニーズがあります。このまま行政に任せていてはいつ解決するのかわからないのが現実です。むしろ、行政でやるよりも市民のみなさんが行う方がうまくいくものがあること、行政ではできないことがあることを自覚しなければなりません。

市民のみなさんの活動は、ボランティア、NPO、コミュニティ・ビジネスと呼ばれ、多くのみなさんの理解を必要としながら、一部の熱意ある人たちによって行われています。その目的は様々であり、必ずしも全ての人の期待に応えてくれるわけではありません。お金で解決できる仕組みではないからです。民間企業であればお金さえ出せばどうにかなる場合もあります。しかし、市民のみなさんの活動には理念があります。行政が大切にしている「公平」とは別ですが、ゆずれないものがあります。そもそも利益をあげるのが目的ではありません。

繰り返して言いますが、自分はよくても困っている人がいること、自分にもできることがあることを知ってほしいと思います。様々な市民活動も、みなさんの理解、支援がはげみになります。身近な「まちづくり」はみなさんが主体となってこそ実現するのです。これは、行政が責任を放棄したということではありません。そうすることでしか手に入らないものがあることに気づいたということです。では行政は何をするのか。私たちはみなさんに「まちづくり」への参加の機会、仕組みを用意していかなければならないと考えています。

まちづくりの課題

幾つかの原因で郊外化が進み、中心市街地が空洞化しています。中心市街地とはその「まち」のみんなが行き交い、出会い、集う場所。文化を蓄積し、継承する場所。単なる商業集積地ではありません。そのまち「らしさ」を感じる舞台として認識し、育てることが大切です。しかし、もっと大切なことは、「まちづくり」の課題は中心市街地の活性化だけではないということです。

北海道には人口5千人以下の「まち」が78、1万人以下ですとあわせて148。道内212のうち70%の数の「まち」が「小さなまち」です。そこでの課題は「働く場所の不足」「若年労働力の不足」です。教育、医療、福祉といった「都市的サービスへの不満」です。多様な居住ニーズを満たす「選択肢が不足」していることです。行政サービスの不足を補う「コミュニティ・ビジネス」が求められています。不十分ながらもそれなりの都市的サービスを供給する、近くの地方都市との連携を図ることです。自分の「まち」にも同様のサービスを期待するのではなく、どこかに行けば必要なサービスが得られるというシステムを構築することです。それよりも、むしろ住んでいる場所の居住環境の改善を試みることです。要するに、暮らしの場としての充実を図ることが課題なのだと思えます。

人口が5万人を超え10万人に満たない「まち」は登別、石狩、北広島、恵庭、岩見沢、千歳のたった6市です。人口が1万人を超え5万人までとなると48。これらの「まち」は全道に散らばっています。地方都市とその周辺のベッドタウン。地域の核としてそれなりの都市的サービスを行っています。これらの「まち」では中心市街地の空洞化ばかりが原因ではありませんが、「まちらしさ」が失われようとしています。新しく住みついた人、仕事の都合でたまたま住んでいる人。祭りや文化を継承する若者たちが「まち」に残れません。参加の機会が用意されていません。車を中心に「まち」ができていますので、公共交通システムが不十分。交通弱者を生み出しています。みなさんが便利な場所へ、豊かな居住空間を求めて郊外へ移動した時も、あるいは中心部に戻ってくる時も、引

っ越しに踏み切れない高齢者があとに取り残されます。サービスの非効率性が問題になります。つまりは、コンパクト化、「まち」なかの活性化を図るとともに近隣商店を育てることが必要です。自然の成り行きにまかせるのではなく、NPOなど行政以外の機関に期待を寄せざるを得ないのが実情です。今の「まち」のままですらどうか暮らしていくことはできるにしても、不便であることは避けられません。「まち」としての身の丈に合ったサービス水準を維持すること、むしろ「集まって住むこと」の楽しさや魅力を創出することが課題なのだと思います。

人口10万人以上の大きな「まち」は道内で10箇所、そこに約350万人62%の道民のみなさんが暮らしています。しかし、大勢の知らない人間が集まって住む仕組みが確立していません。おのおの勝手に住んでいるだけ、嫌になったらそこから逃げ出します。「まち」の中の別の地域に引っ越します。本州の多くの「まち」には、今いる場所から逃げ出さない人たちがいて、地域を守る。そういう意識があるように思います。ところが北海道ではどうでしょうか。定年後は子どものいる札幌へ、多くの人に移り住みます。未練を残しません。「まち」の中は住んでいる人よりも働いている人の方が多く、観光客や見知らぬ者も大勢出入りします。こうした「まち」での最も今日的な課題は災害や犯罪に備えること。安全と安心を手に入れることです。環境に配慮すること、循環型のシステムを構築することです。自分だけがよければいいのではなく、周辺の自治体と連携を図りながら共存していくこと、役割分担を自覚することが課題です。そのためには、「まち」全体の発展とは別に、身近な地域のコミュニティを再生、創出することが必要です。大量消費や車社会など、都市的な生活のシステムを見直さなければなりません。地産地消、職住近接、用途混在、既存ストックの活用・改善です。広い生活圏を前提とした労働市場を用意し、また、より広範な地域の人びとへ都市的サービスのネットワークを構築しなければなりません。要するに、社会的システムの充実が課題なのだと思います。

もうひとつ、考えておかなければならないこと

は、「まち」はそこで暮らしている人たちだけのためにあるわけではないということです。北海道に住みたいという人が大勢います。他の「まち」から他の「まち」へ移りたいという人も沢山います。北海道だから実現できる暮らし方があります。多様な住まい方の要求に応えること。雄大な自然を守りつつ暮らすこと。安全な食材を供給するためには時には土地とともにあらねばならないということ。何よりも北海道らしさを維持していくことがどの「まち」にも求められています。つまり、田園居住、移住、営農への対応です。景観への配慮、身近な自然の活用、レクリエーションです。何よりも、人を受け入れるという北海道文化を失わないこと。歴史を守るばかりではなく、今まさに歴史を作っているのだという自覚が課題です。歴史が浅く、先人たちが夢を抱いて開拓してきた北海道だからこそ、「まちづくり」に柔軟性とチャレンジ精神がなくてはならないと考えます。

まちづくりが目指すもの

多くの「まち」が「個性あるまちづくり」に取り組んでいます。どんな「まち」を目指すのも、そこに暮らす人たちの自由ですが、どんな場合にあって、「まちづくり」は一過性の事業ではなく、私たちに次代へつなぐ責任があるということ認識しなければなりません。「まちづくり」には資金も必要ですから、非現実的な理想を追い求めるのではなく、現状から組み立てていくことが必要です。価値観は人それぞれですから、理解と納得を求めなければなりません。おそらく、最も大切なことは、身の丈に合った水準を設定することです。そのためには合理性、機能性、経済性に対抗する価値観を発見すること。「まちづくり」には時間がかかるということを受け入れることだと思います。

「まちづくり」の目標は象徴的でわかりやすいことが大切です。できるだけ多くの人に伝わり、共有されることが重要です。「美しいまちづくり」「歩いて暮らせるまちづくり」。いずれにしても、安心安全、景観、歴史・文化、子どもの笑顔、元気な高齢者、コンパクトシティ、地域コミュニティ、商店街がキーワードになっています。

まちづくりのために自分にもできること

困っていない時に「まちづくり」に取り組むのは無理な話です。要するに、困っていることに気づくことが必要です。自分は困っていないなくても、高齢者や高齢者を抱えた家族、小さな子ども、子どもを育てる若夫婦、仕事の見つからない青少年、仕事に戻りたい中高年・主婦、ひとりぼっちの若者、行き場のない中高生。みなさんの身の回りにも困っている人がいることに気づくことです。近所の商店街の品揃え、食堂の味、路上駐車、放置自転車、散乱するゴミ。自分自身の不満を認識することです。自分にもできることとはそういうことです。気づくこと、気づいたら誰かに伝えること、自分の考えを伝えること、伝える相手を探すことです。

「まちづくり」のコツとして、私は3つのことを言い続けています。

ひとつは「責任者の明確化」です。「まち」を良くしようと思ったら諦めずに文句を言うことだと思います。行政を使うこと、企業に反省を促すこと、商店に自分の求めているものを教えることです。諦めないこと、見捨てないことです。そこで生きていくしかないとするなら、そこを良くするしかありません。気づいていなければ気づかせること。改善の道を示すことです。そのためには文句を言う相手を見つけること。文句を言う相手を決めなければなりません。

言葉を変えれば、責任者を明確にすることです。誰に言えばいいのか、誰が判断し決定する立場にあるのかを明らかにすることです。今日、効率的な縦割り行政、専門性は役割を終えたように思えます。「まち」をよくするために道路担当は道路をつくり、公園担当は公園をつくり、福祉担当は福祉サービスの心配をし、環境担当はゴミの収集をシステム化します。商業担当は商店街の空洞化を心配し、労働担当は雇用のミスマッチに頭を悩ませます。多くの「まち」では、とりあえず暮らしていくためのシステムができあがりました。現在は、「まち」を造る時代を終えて、「まち」を使う段階にいます。地区の課題、総合的な評価に目配りのできる仕組みが求められているように思います。

行政も、住んでいる人も、訪れた人も、多くの場合、どうすればいいのかわからなくても何が悪いのかに気づいています。あとは、他人の不平不満、批難批評が改善のためには必要不可欠であることを素直に受け入れること、自分がどんなことに責任を担っているのかを自覚することです。

もうひとつのコツは「目標・課題の共有」です。できること、できる人から始めること。参加の機会を創ることです。全員が同じ価値観、同じ考えにまとまることはありません。みんなの同意を得ることに精力を傾けるのではなく、気の合う仲間、同じ環境にいる人、共通の不満を抱いている人同士で、何をすべきなのか、何が問題なのかを語り合い、そう思っているのが自分だけではないことを確かめてみることで、自分の意見が仲間と同じなのかどうかを確かめてみることで。

ひとりでもできることはたくさんあります。自分の家や店のまわりをきれいにすること、道端で挨拶すること、会釈を交わすこと、友だちの誘いや会社の行事に参加することです。そして、熱心な取り組みをしている人たちを冷やかさないで、理解しようとするのです。はげましたり、声をかけることです。場所を貸したり、金銭的な支援をすることです。企業にとって損になることは伝えることです。不満は伝えなければわかってもらえません。褒める時は褒め、うれしかったら感謝の気持ちを伝えることです。叱るべき時は叱り、どうすればいいのかを教え、多様な見方があることを学ばせ、地域の代表として育てることです。他人事だと思わないことだと考えています。

私たち行政の役割は情報を集めることです。情報の意味を理解すること、理解して説明することです。どうすればいいのかを考えることです。責任を持ってはっきりと指示すること、発言することです。誰が何をしたらいいのかを考えること、様々な意見を聞く耳を持つこと、地域が必要としている情報を発信すること、自分たちがどう考えているのかを伝えること、個々の取り組みや活躍している人たちをつなげることです。情報は発信するところに集まります。

最後のひとつは「適切な評価・批判による改善」です。まずい店にはまずいと伝え、買いたいものがない時には欲しいものがないと言うことです。

サービスが悪ければ改善させることです。見苦しい看板は取り除いてもらうことです。関わりたくないからといって諦めるのではなく、指摘してあげることです。他人からの指摘に耳を傾けること、素直にやってみる事です。

口うるさい年寄り連中、他人に注意する人がいなくなりました。私たちはうるさいことを言って嫌われたくはありません。不満な時は別の店を選ぶだけです。別の地区に移り住むだけ、別の「まち」へ行くだけのことです。気に入らない店が潰れて新しい店ができるのを黙って待ちます。企業が進出してくるのを待ちます。社会的評価が代弁してくれることを期待しています。時には行政の担当者、首長が変わるのを待っています。それではいけない。市場競争の激しい都会ならまだしも、選択肢の限られている地方の「まち」で、それは賢い選択とは思えません。自然淘汰を待っていても良くなる保証はありません。同じことが繰り返されます。住んでよし、訪れてよしの「まちづくり」とは、各自が自分勝手に生きるのではなく、サービス精神を持って、他人の評価を気にかけながら、改善を心掛けるということではないでしょうか。名所旧跡、商店街、なにげなく歩いて出会う街角、裏通り。ひとつひとつが「まち」の顔です。ひとつで「まち」が評価されます。

だめなものはいくら言ってもだめだし、改善されることはないという意見があります。言ってわかるくらいなら初めから心配はないという考え方です。もちろん、そうかもしれません。しかし私は、「まちづくり」で最も大切なことは時間がかかるということを実感すること。ひとつひとつ、ひとりひとりの試みをつなげていくこと、持続していくことだと考えています。

まちづくりへの参加の誘い

私たち建設行政が関わっている「まちづくり」の多くは、駅前、中心市街地、大規模跡地の区画整理、再開発、街路の変更です。少しでも補助金を入れるために「道路の拡幅・変更」があり、実はそれが「まちづくり」のきっかけとなっています。都市計画の変更もまた、国道がらみの道路の計画変更がきっかけで、土地利用の見直しがあり、

果ては全面的な見直しに及びます。しかし、これまで行政は事業の計画的な推進を重要視することはあっても、その効果や運用に思いをはせることはまれでした。できあがった都市施設を利用するのは市民、民間だと考えていたからです。

今日、公共事業は「目的よりも成果を求める」ことを重要視しています。「まちづくり」事業でどれだけ商店街の客足が伸びたのか、シャッター街が解消されたのかが問われます。道路として道路をつくるのではなく、公園として公園をつくるのではなく、「まちづくり」の一環としてそれぞれの事業の効果を想定することが大切になってきました。

市民参加、市民主体、市民との協働。いろいろな言葉で語られますが、要するに「使う者」の話をきけということです。意見を言わせる、考えるための情報を与えるということです。専門家のみなさんに求められていることは情報の価値をわかりやすく分析し説明することだと思えます。多くの方が容易に情報を入手できるようになりました。しかし、その情報の意味を理解する者は稀です。コンパクトシティに向けた各国の取り組み、ニューアーバニズムを我が国にどう持ち込むべきなのか。あるいは「道路を新しく作ること」の意味、効果はいかなるものなのか。

個人的な思いではありますが、私は「ひとりひとりがまじめに自分の仕事、役割を果たしていくことで、安心して暮らしていける社会になる」という仕組みをつくるのが政治や行政の役割だと考えています。いろいろなことに思いをはせながらも、自分にできることを真面目にやること、できることから逃げないこと、まずは目の前の問題に取り組むことが、社会人としての自分の務めだと考えています。諦めないこと、やり続けること、時にはやり直すことが、責任をとるということです。

多様な居住空間の提供、便利な交通ネットワーク、環境との共生、適切な廃棄物処理、潤いのある都市空間、誰もが安心して暮らせる社会システムの構築は行政の役割ですが、「美しいまちづくり」は行政だけではできません。なぜなら、「美しいまち」とは、そこで暮らし行き交う人の姿が活

力にあふれ、安心と豊かさを実感していなければならぬからです。住みたいと思ひ、訪れたいと思ひ、そこで死んでいきたく思ふ「まち」。「美しいまち」は誇りです。

身近な空間や建物は、使いやすいこと(機能的)、無駄がないこと(合理的)、かけた金に見合う効果があること(経済的)が価値なのではありません。使えればいいのではなく、気持ちよく使えること、使ってみたくなることがその価値なのです。使う人が誇りを感じること、使うことが自慢であること、大事にしたいと思ふこと。頑丈なつくりや何にでも使える大きさが建物・空間を長持ちさせるのではなく、使いにくくても使っていきたいと思わせる「価値」が長持ちさせるのです。

孫を抱く老婆の中に美しさがあるように、遠くを見つめる老人の後ろ姿に美しさがあるように、大切なことは美しさを感じる心、美しさを見つける思想、美しさを伝える物語です。「まちづくり」とは、共有できる「物語」を創ることです。「美しい」とは、物語を「共有」できるということです。

「まちづくり」とはこの社会に住む私たち、集まって住む者の義務であり責任なのだと思います。やりたくてやるわけじゃない。やらなければならないからやるのです。任せておけないからやるのではなく、任せてはいけぬから自ら関わるのです。

何度も繰り返していますが、「まちづくり」「地域づくり」は自分のためだけではなく、次の世代へと引き継いでいく大人の責任です。自分にできることは何なのか、ひとりひとりがそのことを考えるべきだと思っています。

「まちづくり」とは自分の人生を充実して生きることに似ています。目標は何かとたずねられても答えることができません。ただ、自分に恥じないよう努力するだけ。日々を積み重ねていくだけです。「素敵なまちとは、そこに住んでいる人が素敵なまちだ」という言葉があります。どうかあなたも「まちづくり」に参加してください。